

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

フィレンツェ滞在手記

## \* 楽しみとしての語学留学 ① \*

濱 恵介

2015年4月中旬から約3ヶ月間、私はイタリア語の学習を主目的に、単身でフィレンツェに滞在しました。実に楽しく充実した日々でした。この体験を振り返りながら、私なりのイタリア滞在の楽しみ方やイタリアの理解について、3回に分けてご紹介します。



【フィレンツェ風景】

### ■背景

私は太平洋戦争末期の生まれで、今回のイタリア滞在中に71歳となりました。何故この歳になってイタリア行きを思いついたのか、まずご説明しなければなりません。65歳で定年退職し70歳目前まで非常勤の顧問として会社に席がありました。一方、住まいのある奈良では、フランスとの文化交流を目的とする団体の事務局運営からようやく解放される目途が立ち、「これを機会に何か楽しい記念事業をやろう」と考えた訳です。言わば46年に及ぶ会社勤めと5年間のボランティア

活動への個人的なご褒美です。その内容は「いま自分が一番やりたい楽しみを見つけること」でもありました。

気分を一転し新鮮な経験を得るには、やはり海外へ行き滞在することが一番です。その目的地をイタリアとするのにあまり迷いはありませんでした。これまでの体験から、外国ではヨーロッパが最も居心地が良く、その中で「いちばん行きたい、しばらく滞在したい」と思う国・地方が「イタリア・トスカーナ」となったのです。

随分昔になりますが、イタリアへは以前に2度行ったことがあります。初めての訪問は1972年の秋、フランス政府の奨学生としてストラスブール建築学校へ留学中のことでした。広場や街路など歴史的な都市の外部空間研究の現地調査を目的に3週間かけローマ以北の諸都市を巡りました。次が1973年の春、地中海の西半分の諸国を巡る旅行の終盤、シチリアを経てイタリア半島を北上する1週間でした。いずれも妻と二人の自動車による旅行で、楽しく感動的な思い出が沢山あります。その後フランスやドイツには何度も旅しているのに、何故かイタリアには一度も行くことがなかったのです。その懐かしさが新たな憧れに変わり、イタリア行きを促したのでしょう。

さて、どんな形のイタリア行きがあり得るか思案する中、イタリア語が普通に理解でき話せることが滞在を楽しくする条件であることは容易に想像できました。日常生活や旅行の便宜はもちろん、美術館での説明書きや参考図書の読解など、文化理解に語学力は欠かせません。それに長期滞

在では、完全に自由であるよりも日課のようなプログラムがあった方が生活のリズムを保ちやすいものです。そのような理由から語学学校に通いイタリア語の勉強を楽しみながら、その他の関心事に取り組むのが最適と判断した訳です。

語学以外の関心としては、時間の許す限り多くルネサンス期の優れた美術作品(特に絵画)をじっくり眺め鑑賞したかったことが第一。フィレンツェを目的地に選んだ主な理由はそこにあります。それと重なりますが、ヨーロッパ文化史におけるイタリアの果たした役割にも関心がありました。もう一つの願望は、思い出のある歴史的な都市群の広場や街角をもう一度訪れたいというものでした。これら二つの目的は、滞在中の国内旅行の目的地選びともつながっています。

学校選びや住まいの確保について皆目見当がつかないので、たまたま存在を知った日本イタリア会館に斡旋を相談することにしました。京都の本部を訪ね窓口で「語学留学についてのご相談を」と用件を告げると、「どなたがいらっしゃるのですか？」との返答。「やはり高齢者の留学は珍しいのかな」と思いながらも、一般的な状況を教えていただきました。詳細は日を改めて事務長から具体的に説明を受けることになり、次第に留学の意志が固まって行きます。

フィレンツェにおける語学学校は選択肢が三つほどあり、その中で比較的小規模で日本人スタッフもいる Istituto Europeo という学校にしました。その後、住居に関するこちらの希望を伝え、先方からの提案がうまく合致したので、出発の 3 か月前には時期や費用など計画の大筋が決まりました。滞在期間はヴィザ不要の 90 日を上限に想定し、受講期間は 10 週間です。

## ■40年ぶりのイタリアへ

関空からフィレンツェへはルフトハンザ便が乗り継ぎも好都合で、目的地に夕方 6 時前に着きます。フランクフルトで乗り換えドイツの平野を過ぎると、眼下に雪に覆われた山々と深い渓谷の地形、アルプスが見え始めます。初めてイタリアへ行った時は、古い車でオーバーヒートしそうなエンジンを休ませながら延々と続くつづら折れの坂道を上り、ザンクト・ゴットアルド峠をやっとの思いで越えたものです。今回は何と簡単なアルプス越えで

しょうか。

ロンバルディア平野を過ぎアペニン山脈を越えるといよいよトスカーナ。高度を下げ始めた飛行機の窓からは明るい夕日を浴びた緑の田園風景が見えました。何と美しい景色！そしてフィレンツェ空港へ着陸する間にあのサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラも。中央駅に向かうバスの窓からは、ゆるやかな勾配の瓦屋根と黄味がかった壁の建物、糸杉や傘形の松が見え、「ああ、とうとうイタリアに、フィレンツェに来たんだ」という感慨がこみ上げました。

最初の夜は予約しておいた駅近くのホテルに投宿。斡旋された住居へ直接行く可能性もありましたが、到着遅れや万一荷物が届かないような事態を考え、不安の少ない確実な方法を選んだ訳です。翌日タクシーを使って荷物とともに住居へ移動しました。家主の名前の呼び鈴を押すと解錠ブザーが鳴って扉が開き、ようやく無事に目的地の住居に落ち着きました。通学開始までまだ 2 泊あり、時差は乗り越えられそうです。

## ■イタリア語の学習

私にとってイタリア語は未知の言語ではありませんでした。40 数年前の旅では英語・フランス語がほとんど通じない状態でしたから、宿探しや食事・買物などに必要な単語を覚え、片言のイタリア語で何とか意思を伝えていました。今回はイタリア行きに備えて、出発の半年以上前からNHKラジオ第2放送の講座「まいにちイタリア語」を欠かさず聴き、テキストも活用しながら一人で事前勉強をしました。フランス語の知識があったお陰で、文法や単語を理解し記憶するのは、さほど難しくなかったと思います。

さて通学の初日、Istituto Europeo へ行くと、まず日本人スタッフから基本的な手続きの流れについて説明があり、受講料の清算支払いを済ませました。ここまでは全て日本語で済むので大変楽です。その後すぐに別室でクラス分け能力判定の筆記テスト。問題を理解するだけでも時間がかかり、与えられた 50 分ではとても終わらず回答にも自信がなく冷汗ものでした。次いで校長と主任教師による口頭試問があり(もちろんイタリア語で)、イタリア語の経験や学習の目的などについて問われます。何を尋ねられているのか概ね分かっ

ただけでも嬉しいことでした。日本では語学学校へ通ったことがなく、従ってイタリア語の先生もいなかったこと、フィレンツェ到着までイタリア語で会話をした経験がなかったこと、などを説明すると、“Complimenti!”とお褒めの言葉をもらいました。

状況が分からないまま早速教室に案内され、本場でのイタリア語の学習が始まったのです。先生は Ilaria という若い女性教師、同じクラスにいた生徒はドイツ・スウェーデン・日本からの若い女性 3 名でした。初日は教科書を隣の人に見せてもらいながら、様子見のような気分で終わりました。授業後に校則や日常生活のガイダンスがありましたが、以上の手順は後述する学期の途中入学だったため、一般的な形ではありません。

イタリア語を受講している生徒は 15 名ほどのこと。本当にこじんまりした学校です(但し、6 月には教授二人に引率されたアメリカの大学生達がどっと入って約 3 倍に急増)。あとになって、私の入ったクラスは 3 段階ある本校のレベル分けの最上級であることを聞きました。

授業の進め方は、まず生徒一人一人に前日ないし週末の出来事を自由に語らせ、それに関する語彙や表現力を増すような形で教師との会話が交されます。他の生徒も質問や関連の発言をして構いません。

それが一通り終わると教科書を使って主に文法の講義。教科書はうまく出来ていて、イタリアの歴史・地理・社会問題などが素材となっており、言語のみならずイタリアの文化や国情の理解を促すように編集されています。練習問題も多く、生徒が順に答えて、正しければ Benissimo とか Perfetto などと褒められ、間違っていれば訂正されその理由を説明される、という形で進みます。

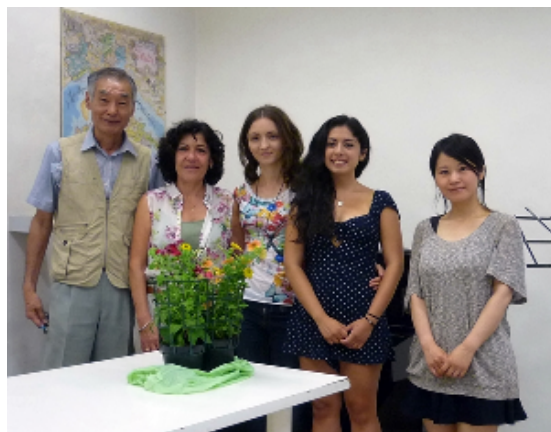
生徒は英語やフランス語で単語の意味などを確認することが容認されますが、教師は決して外国語での説明はせず、イタリア語のみで(白板にイラストを描いたりして)説明し納得させるのです。この巧みさには感心するばかりでした。他の言語を介さずイタリア語で直接理解することの大切さを示すかのようでした。

また通常の授業とは別に、与えられた選択肢の中から生徒がテーマを選んで準備し発表(プレゼンテーション)をするプログラムや、字幕付きのビデオでイタリア映画を見て感想や疑問点につい

て討論することなども行われました。

学習の成果を評価するため、毎週 1 回は文法ないし作文のテストがあります。授業に伴うテストなど一体何十年振りでしょう。翌日は添削された答案用紙が返され、間違いと正解を確認し、理解できていない点の質問などができます。私の受講目的は知的な楽しみと滞在中の実用のためでしたから、資格や認定証など必要とせず気楽な勉強のほずでしたが、「テスト」となるとやはり評価は気になるものです。その前日は文法の復習や作文の準備に取り組みました。

この学校の授業は 4 週間が一つの単位(学期)となっており、受講期間はその倍数が基本です。私はよく知らないまま 10 週間で申請し、結果的に 2 週+4 週+1 週間の休校を挟んで 4 週というプログラムを受講しました。4 週間だけで去って行く人もいれば、1 年間続ける人もいます。



【受講最終日のクラス、左端が筆者、中央イラリア先生】

ちなみに 10 週間の授業料は、登録料を含め€1,570 で、日数は祝日などの休みを除くと実質 45 日になり、1 日(3 時間)当たり€35 に相当します。「これを無駄にしては勿体ない」と、一度も休まず遅刻もせず精勤した甲斐あってか、受講最後の日には文法・会話ともに B1 の認定証を頂戴しました。6 段階評価の下から 3 番目だそうで、「七十の手習い」にしては上出来です。

イタリア語の学習だけでも有意義なフィレンツェ滞在でした。ましてや並行して実践した他の楽しみを加えると、さらに「語学留学」の価値は増します。(続く)

(個人維持会員、エコ住宅研究家)

## イタリア語の詩を読む III

国司 航佑

イタリア初のノーベル賞作家ジョズエ・カルドゥッチ (1835-1907) は、様々な顔を持っていた。国家統一運動 (いわゆるリソルジメント) を謳う国民的詩人。西洋古典に通暁した古典詩人。イタリアの文学の伝統に縛られない新たな詩形を生み出したアヴァンギャルド詩人。そして、ボローニャ大学で教鞭をとる文学教授。

ところが、人々に最も愛された作品の一つ *Davanti San Guido* (「聖グイード祈禱所の前で」) は、上掲の様々なカルドゥッチ像のいずれにも当てはまらない。むしろ、そうした「大詩人カルドゥッチ」を前に戸惑う、一人の「人間カルドゥッチ」を描写しているようである。

- 1 I cipressi che a Bolgheri alti e schietti  
聖グイード祈禱所からボルゲリの丘まで続く
- 2 Van da San Guido in duplice filar,  
高くて真っ直ぐに伸びた二列の糸杉の道
- 3 Quasi in corsa giganti giovineti  
巨大な少年が飛び出てくるかのよう
- 4 Mi balzarono incontro e mi guardâr.  
私の前に現れて私を見つめた。

これが冒頭の句である。イタリア語原文は少々手ごわいので、まず原文下に示した拙訳を見てもらいたい。擬人化された糸杉の並木との突然の邂逅。これから何事が起きる展開が予測される、とても新鮮な始まり方ではないか。

ところで、イタリア語の韻文の規則について一言説明が必要かもしれない。重要な規則としては、一行の音節数が一定であること、そして行末で韻が踏まれていること、の2点が挙げられる。音節とは、母音一つとその周りの子音との組み合わせで作られる発音可能な音の単位である。イタリア語の場合、普通、連続する母音を一母音と数えるから、例えば 3 行目の頭は、

“Qua” で一音節と数えることになる。「連続する」という考え方はなにも同一の単語内に限ったものではないから、同じ行の第 2 音節は (2 つの単語にまたがって) “si in” ということになる。この音節の最後の子音 “n” は、第 2 音節の最後とみなしても第 3 音節の最初とみなしても、全体の音節数に影響は与えない。だが、第 3 音節に含んでしまうと、“nco” という、イタリア語では発音できないはずの音のまとまりができてしまうから避けるべきだということになっている。

こうした規則を基に 3 行目を音節に区分すると、<Qua / si in / cor / sa / gi / gan / ti / gio / vi / net / ti> という風になる。全部合わせて 11 音節——これこそがイタリア詩の最も規範的な音節数である。11 音節によって作られる一行を *endecasillabo* と呼ぶのだが、この単語はギリシャ語に由来している (*endeca* が 11、*sillabo* が音節)。さて、以上に説明したところを踏まえて、上掲 4 行の音節数を数えてもらいたい。おや? と思われた方は、正しく数えられた方だろう。そう、第 2 行と第 4 行は、全部で 10 音節しかないのである。それでは、ここでカルドゥッチは *endecasillabo* 以外の音節数を採用したのだろうか。

否、これら 2 行はれっきとした *endecasillabo* である。先ほど、11 の音節で構成される 1 行を *endecasillabo* と呼ぶ、と述べたが、実のところ、これは言葉の由来からくる定義であって、辞書的な (あるいは教科書的な) 定義ではない。正確に述べるならば、*endecasillabo* とは第 10 音節に最後のアクセントがくる 1 行のことであって、実際の 1 行の音節数には多少幅があり、最小で 10 音節から最多では 13 音節以上になりうる。これらをまとめて「11 音節 *endecasillabo*」と呼ぶのは、イタリア語の単語の中では後ろから 2 番目にアクセントが来るものがほとんどであり、「第 10 音節」に最後のアクセントが落ちることと、合計 11 音節であることが、多くの場合一致することだからである。イタリア人の耳には、音節数そのものよりもアクセントとの関係から考える音節数が問題になってくる。最後のアクセントの後に続く音節は、基準より長かろうが短かろうがあまり重要でない。本当に重

要なのは、合計で何音節あるか、ではなく何音節目に最後のアクセントが落ちるか、なのである。以上の説明で、「聖グイード祈禱所の前で」の第2行目と第4行目とが *endecasillabo* であると述べた理由が分かっていたただけだろうか。

さて、イタリア語の詩形に関するもう一つ重要な規則として、脚韻がある。脚韻とは、各行の最後のアクセントの落ちた母音以降がすべて同じ音になるように単語を配置することである。

「聖グイード祈禱所の前で」冒頭4行においては、第1行 “*schietti*” と第3行 “*giovinetti*” とが、第2行 “*filar*” と第4行 “*guardâr*” とが韻を踏んでいることがお分かりになるだろうと思う。ところで、読者諸氏の中には、既にこれらの単語を伊和辞典でお探しになった向きもあるかもしれない。その場合、*filar* や *guardâr* という語は普通の辞書には見当たらなかったはずである。そう、*filar* とは *filare* (並木道) の、また *guardâr* は *guardare* の3人称複数遠過去 *guardarono* (「彼らは見た」) のことであり、カルドゥッチの詩においてはこれらの単語が語尾を省略する形で使われていたのである。ではなぜ *filare* ではなく *filar* と、*guardarono* ではなく *guardâr* と言わなければならなかったのだろうか。それは無論、韻を踏むためである。*filare* と *guardarono* の最後のアクセント以降の音のまとまりは、それぞれ *are* と *arono* である。これでは、「最後のアクセントの落ちた母音以降がすべて同じ音」にならず、従って脚韻は成立していないことになるのだ。

普段のイタリア語と異なっているのは、なにも *filar* と *guardâr* に限ったことではない。語順の変更や語尾省略が至る所に見られるではないか。上の4行を普通のイタリア語に直せば、さしあたって次のような文章になるだろうか——*I cipressi che vanno alti e schietti in duplice filare da San Guido a Bolgheri mi balzarono incontro e mi guardarono quasi (come) giovinetti giganti in corsa.* これで、冒頭に示した拙訳についても、私がなぜこのように語順を変更したのか、ご理解いただけたら。むしろここに書き下した文については、辞書を活用すれば拙訳を参照せずとも理解するのはそこまで難しくないかもしれない。とはい

え、韻文の規則に合わせて普段の言語を歪めることこそが、韻文の本質的な特性である。だからイタリア語を母語にしないわれわれにとって、イタリア語詩を理解するのは非常に困難な所作となる。

イタリア詩を理解することの困難さについてはしばしば措くとして、「聖グイード祈禱所の前で」の続きを見てみよう。以下に掲げるのは、第2聯(第5行から第8行)である。

5 *Mi riconobbero, e - Ben torni omai -*

私のことが分かんると、こちらの方に頭をおろし

6 *Bisbigliaron vèr' me co 'l capo chino -*

「ようやく帰ってきたね」と囁く。

7 *Perché non scendi? perché non restai?*

「降りていきなよ。ゆっくりしていったらどう？」

8 *Fresca è la sera e a te noto il cammino.*

今晚は涼しいし、君は道も知っているだろう」

まず形式的なところから見ていただきたい。第1聯で行った作業をそのまま繰り返せば、第2聯に関しても、4行いずれとも *endecasillabo* であり、また第5行と第7行、第6行と第8行とが、それぞれ韻を踏んでいることがお分かりになるだろう。つまり、第1聯と第2聯とは、1行の音節数も、韻の踏み方も、全く同じなのだ。しかもこの形式は、「聖グイード祈禱所の前で」の全29聯全てに共通しており、全体として、非常にシンメトリックな構成になっていると言える。この対称性が、長く連なる2列の糸杉の道のイメージを喚起するのに一役買っていることは、改めて強調する必要はないだろう。

意味内容についてはどうだろうか。擬人化された糸杉が発する言葉から、「私」が故郷に帰ってきた場面が詠われていることが想像される。しかし「降りる」という単語は、何を意味するのだろうか。突如現れる糸杉、止まろうにも止まれない「私」…そう、「私」はいま機関車に乗っているのだ。現代文明の象徴たる機関車を、カルドゥッチはいくつかの詩篇の中で様々に描いているが、「聖グイード祈禱所の前で」においては、故郷へと帰る電車の窓から見える外の風景が描写されている。読者諸氏は、電車に乗っているとき、動いているはずの自分が止まって

いて、止まっているはずの周りが動いているように錯覚した経験をお持ちではないだろうか。電車に乗るときに誰しもが体験するこうした錯覚を利用して、カルドゥッチは一篇の詩を作り上げた。糸杉が擬人化されていることと、電車に乗っていることとの間には、視覚的な関連があるのだ。

第3聯以降、「私」は、糸杉たちの誘いを頑なに断り続ける。もうあの頃の少年ではなく、西洋古典にも通曉した大詩人になってしまったからだ。しかし、糸杉たちも舌鋒鋭く、「私」が追い求めているのが「汚れた幻 rei fantasmii」に過ぎないことを暴く。その後、「私」は糸杉たちの誘惑には打ち勝つことができるのだが、会話の中で今は亡き祖母ルチーアのことを触れられると、急に動揺し始める。西洋社会では、糸杉は、しばしば墓地に植えられることから墓地もしくは死を象徴する植物とされている。「聖グイード祈禱所の前で」においても、ある種の連想ゲームのような形で、糸杉との会話から墓地に眠る祖母のイメージが喚起されたのである。現れた祖母のイメージに対して、私は懇願するように話しかける。この「賢い男」(＝「私」)にあのおとぎ話を語ってくれないか、と。第26聯において描写される祖母に対する「私」の感情は劇的なものである。

101 Deh come bella, o nonna, e come vera

おばあさん、そのお話は、今でもなんと美しく

102 È la novella ancor! Proprio così.

なんと真実なのだろうか。まさにその通りだ。

103 E quello che cercai mattina e sera

何年も何年も朝晩探し求めて見つからなかったものが

104 Tanti tanti anni in vano, è forse qui.

ひよつとすると、ここあるのかもしれない。

名誉も栄光も手に入れた大詩人が、子供の頃に聞かされた一つのおとぎ話のうちに真実を見出す。筆者はこのコントラストにはっとさせられた。次の聯で「私」の心の声が終わると、最後の2聯はリアリスティックな風景描写に割かれる。そしてそれは、非常にニュアンスに富んだ風景描写になっている。

109 Ansimando fuggia la vaporiera

機関車が煙を吐きつつ逃げていく中

110 Mentr' io così piangeva entro il mio cuore;

私は心の中で泣いていた。

111 E di polledri una leggiadra schiera

そして、優雅な仔馬の一群は、嘶きながら

112 Annitrendo correa lieta al rumore.

幸せそうに騒音の方に駆けていった。

113 Ma un asin bigio, rosicchiando un cardo

その一方で灰色のロバは、赤く碧い

114 Rosso e turchino, non si scomodò:

カルドゥッチを齧りながら、その場を離れない。

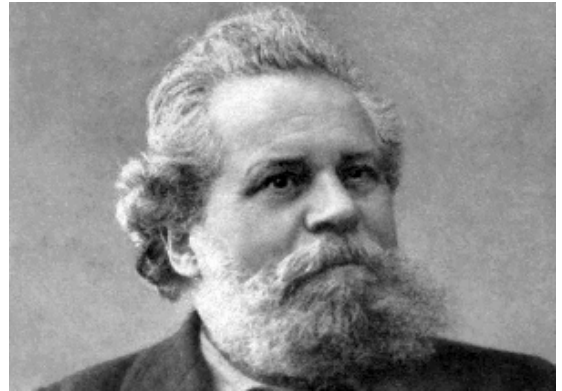
115 Tutto quel chiasso ei non degnò d' un guardo

あの喧噪には一瞥をくれさえないで

116 E a brucar serio e lento seguitò.

真面目にゆっくりと、葉をかみ続ける。

この最後の2聯については、様々な解釈が可能だろうし、現に、注釈者の見解も一致を見ないようである。筆者も筆者なりに思うところがあるが、この場ではそれを提示しないでおきたい。読者諸氏には、自らの第一印象に浸ってもらいたいからである。



【ジョズエ・カルドゥッチ】

画像出典: [https://it.wikipedia.org/wiki/Giosu%C3%A8\\_Carducci](https://it.wikipedia.org/wiki/Giosu%C3%A8_Carducci)

(京都外国語大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>